

第七章 信 仰

第一節 宗門人別帳

江戸時代幕府のキリスト教禁止のため、宗門改めが全国的に実施され、全国民が仏教徒として登録されるに及んで作成されたものである。領主は戸数、人口、生産高や生活状況を把握する役割を果していた。元禄三年、領主小笠原氏に提出された中富村百姓宗門改帳である。禅宗富西寺檀家二十二戸が記載されている。世帯構成人数が一五〇九人と大所帯であることから、当時の中富村の家族形態は、大家族によって農業を営んでいた近世初頭の形態をとどめており、単婚小家族化は進んでいなかったようである。届け出内容を知るため名主のみ掲載した。二十二軒の他は別の領主に提出された。

元禄三年午十一月

上総国周集郡中富村百姓宗門改帳

中富村宗門改

一	一代々禅宗富寺旦那	名主	五郎右衛門	印
一	二間塚水深ノ十兵衛娘		女房	印
一	五郎右衛門惣領		辻右衛門	印
一	中ノ村玄性娘		女房	印

一同 同人二娘

亀 印

一同 太地右工門ヘカス 五郎右衛門三娘

先祖トナル しゅん 印

一同 同四男 六之助 印

一同 田中氏江カス 月窓院

辻右工門娘 さき 印

一同 五郎右工門下人普代之者 助十郎 印

一同 同人下女普代之者 たつ 印

一同 同人下人普代之者 市兵衛 印

一同 是ハ当午二月ヨリ坂田村六郎右工門所江

一同 老年居奉公ニ出シ申候 市左衛門 印

一同 同人下人普代之者

一同 是ハ当午三月ヨリ富津村酒屋助右工門所江

一同 尙季居ニ奉公ニ出申候 賀之助 印

一同 是ハ当午十月ヨリ富津村四郎左工門所江

一同 預ケ置申候 同人普代之者下女 はる 印

一同 是ハ去巳正月ヨリ篠部村七兵衛所江 式年季ニ

一同 定奉公ニ出申候

定奉公ニ出申候

一同 五郎右衛門下女普代之者 つま 印

是ハ辰極月ヨリ神納村庄兵衛所へ三年季ニ

相定奉公出申候

合、拾五人内五人者他所江奉公ニ遣ス

他ハ家号のみ記す

所左衛門 新右工門 太右工門 六右工門 兵左工門

治右工門 六兵衛 伝兵衛 六郎兵衛 佐五兵衛

市郎左工門 仁左工門 八左工門 佐次兵衛 善左工門

作左工門 十郎兵衛 清右工門 新左工門 忠左工門

藤左工門

人数合百六拾六人内百人ハ男 六拾四人女忒人道心

右之者共 不残禅宗ニテ拙僧且那ニ紛無御座候 若御法度

之耶蘇宗門抔ト申者御座候ハバ 何時成共拙僧罷出申分ケ

可仕候、仍而如件

本寺上総国西川村正珊寺 末寺 富 西 寺 印

元禄三年十一月三日

上総國中富村

名主 五郎右衛門 印

大草平内殿

組頭

元禄三年十一月

上総国国集郡中富村正珊寺

中富村定印改

一 伴之禅宗首領寺長 印

一 同 三河源水原寺長 印

一 同 中富村寺長 印

第二節 出羽三山信仰

出羽三山とは、月山・羽黒山・湯殿山の総称であり、昔より行の山、浄めの山、祖霊安鎮の山として、崇めて参りました。又、修験の山、山伏の山として名高く、その信仰域は、東三十三ヶ国（関八州、奥羽、佐、信、越）に及び日本人の心の故郷として、代々継承されてきました。年間来山者は今でも百八十万人に及んでいるとか。

出羽三山の開祖は、聖徳太子の従弟蜂子皇子が丑年に奥の院湯殿山を開かれことを因んで、この丑年を以って出羽三山全体の御縁年とされてきた。又、山の主峰、月山の山容が庄内地方から見ると牛が横たわっている様に見えることから、別名臥牛山ともいわれ、それ故「牛」は出羽三山の象徴的存在としてみなされるようになった。

出羽三山の信仰は、実に一千四百年もの伝統があり、中富部落でも二百年以前からの信仰があったと言ひ伝えられている。羽黒山の境内の石燈籠の一つに「貞元村中富講中」と刻みこまれたものを見ることができる。

出羽三山に参拝に行くのには、昔は歩いて木更津まで行き、そこから船で江戸へ、再び歩いて、関東・北陸を経て、お山

入りしていた。坊へ泊まりながら三山参拝後は、東北・北陸・信越・佐渡方面に旅を続け、数ヶ月かかって帰ってくるという信仰であった。昭和三十五年七月二十日の代参の記録をみると、佐渡廻り六泊七日、費用一人七千九百五十円（当時のサラリーマン初任者給料九千円）と記されている。今は、交通機関が便利になり、日時こそ短縮されてきたが、方面や経費には、あまり変わっていない。

出羽三山へ参拝に行った人達は、部落民から「行人」としてあがめられ、石上神社の裏手に行人の屋方「行屋」を建て修業の場として、修業に励んだ。土用行、寒行のときなどは裏手の井戸水をかぶり、身を浄め、三泊四日の行を行っていた。又、湯殿山の縁日に当たる月の八日には、八日講と称して、行屋に一日中籠って行を行っている。

中富には、近年、本格的に出羽三山で修行した人がいる。それは、齊藤俊雄（湯屋）で、秋の峰を十年以上に渡り参加して、昭和五十八年八月三十一日に「十度位先達号」『俊快』を拝命している。修業後は、各方面に布教活動してきたが、平成七年十二月に没せられた。

当部落でも行人の高齢化で、その後継者の危機にさらされている。平成八年七月にこのことを案じ、今迄、この信仰に

関係のある者、五名で十三年ぶりに、出羽三山へ出向いて何とか、この信仰を継続しようとしている。



月山神社参拝（平成9年7月）



月山遠望



行人葬

第三節 講とのかかわりあい

古峯講、御嶽講、成田講、富士講、江戸講、えびす講

古峯講

今から百四十年前、安政六年に中富部落は、大火に見舞われ、部落の北部の大半を焼失したのである。

部落の中心にあった石上神社も焼失するという大火事であった。ところが不思議なことに、神社の隣であった二軒（嘉平と六郎兵衛）は難を免れた。このことが当時、部落中大変な関心事になった。火災当日は、夜中で北風の強風に見舞われたので部落民は手のくだしようもなかったようである。

難を免れた二軒は、親戚の人達の必死の消火活動ではないかと思われていたが、家屋の炊事場に火伏の神である古峯神社のお札が貼られていたことが噂になった。

当時、中富部落は、古峯神社への信仰はなかったのですが、この二軒のお札は、六郎兵衛から久保（旧君津市）へ嫁いでいった叔父が栃木県の鹿沼市の古峯神社への信仰が厚く毎年参拝され、そのお札を六郎兵衛宅へ届けることが慣わしとしていた。

それ以来、古峯神社を火伏の神として、部落全体で信仰す

るようになった。そして、部落を三つに分けし、古峯講が毎月一日に行われてきた。そして、各ブロックから、お正月に代参者を選び、毎年六月頃代参者は古峯神社に参拝し部落全戸数分のお札を頂き、それを各戸が炊事場へ供える慣わしとなっていた。

ちなみに、平成七年は、六月十八日に代参が行われている。



古峯神社

御嶽講

どの様にして中富の人達が御嶽山を信仰する様になったか、中富御嶽講の由来について述べてみたい。

木曾の御嶽神社の分社が人見の馬込九一二番に建立されたのは、昭和二年三月十四日である。神社の敷地は貞元村中富の齊藤吉郎兵衛（泉屋）が寄贈したものである。同氏は米穀肥料商を営み、商売のかたわら、御嶽講を作り、講者を拡張して、神のご加護ご利益にあやかりたいと日夜東奔西走したのである。

開山式の当日には、吉郎兵衛による「湯立て」の儀式が行われ、この珍しい儀式が評判となり、これを見学しようと近郷近在から多くの善男善女が参詣につめかけた。神社の境内は、満員の盛況であったといわれている。この「湯立て」の儀式は、開山以来絶えることなく先達に引き継がれ、現在も毎年三月十四日の祭礼において執り行われている。

「湯立て」の儀式というのは、社前の周囲に紅白の幕を張りめぐらし、四方に青笹を立ててメ縄を張り、その中央に大釜いっぱい湯を沸騰させる。湯が沸くとその前でしばらく祈禱し、熊笹で沸騰した湯を頭上から浴びるといふ荒行である。この荒行に講者をはじめ参詣者はただ驚嘆するばかりで

あった。吉郎兵衛は火傷ひとつしなかつたそうだ。またこの「湯立て」の儀式に使った薪の残り炭を参詣に来た人々は皆一片ずつ持ち帰り、門の柱や玄関などに吊して、火難の防除と家内安全、五穀豊穡を祈った。これは、現在もなお引き継がれている。

この様にして、人見地区から中富地区に、昭和初期御嶽講が普及してきた。初代先達に瀬戸濱治氏（作助）が選ばれて、中富御嶽講が正式に始まったのである。二代先達は齊藤長五郎氏（長左衛門）が担当された。尚、順序不同だが次の方が先達になられた。齊藤滝三郎氏（かじや）齊藤寅藏氏（重兵衛）齊藤音吉氏（とでんきよ）田村玉吉氏（太治右衛門）齊藤清太郎氏（湯屋）齊藤清氏（源左衛門）田村米治氏（新左衛門）齊藤聡氏（六右衛門）齊藤宗司氏（せんべいや）齊藤勇二氏（半三郎）と聞いている。

瀬戸濱治氏先達の時代に、石上神社境内にて御嶽講の行事が行われたそうである。それは薪を並べて、その薪に火をつけて燃やし、その火の上を素足で歩き渡る行事であった。また、講祭りが毎月当番制で行われていた。当番の家で御祈禱をし、ご飯と精進料理をご馳走してもらった。精進料理は魚、肉が入らないもので、主に野菜や豆腐を使って施主が献立を

した。米は講中の各戸で一合位を出し合った。木曾の御嶽山への参拝は、毎年三人から五人位の代参が選ばれ、その費用は講が負担したのである。

二代先達齊藤長五郎氏が昭和五十二年九月に亡くなられてからは、中富御嶽講は残念ながら執り行われていない。



昭和38年代参。御嶽山頂上、剣が峰（3,063m）

成田講

昭和四〇年代頃まで、月一回成田講が行われていた。成田講は、成田山新勝寺、不動明王大日如来を崇拝する。現代は、交通の便が良く、車や電車で行けるが、昔は、代参者が年一回お正月に歩いて行った。その頃は、千葉で一泊したという。代参者がお参りし御札を講中に配付した。

講は中富北部に一組、南部に一組あり定期的に行われていた。北部は昭和四〇年頃廃止したようである。南部では、源左衛門、嘉兵衛、清蔵、五郎左衛門、七郎衛門、湯屋という顔ぶれで行われていた。ポツポツと抜けて行き最後の講には源左衛門（さつ）、清蔵（国一）、嘉兵衛（孝一）、湯屋（俊雄）の四軒が残り、平成六年三月に湯屋を宿として行われた。木箱から皿、腕を出し精進料理を盛り掛軸の前にお供えし、食事をした。この時点にて今後この成田講を続けるのは不可能である為止めようではないかという相談になり、一式（掛軸、食器等）を行屋に預かってもらおうという結果になった。湯屋（俊雄、行屋先達）が、後日行屋へこれを保管した。中富にたくさんあった講で、この成田講もなくなった行事の一つである。

富士講

神社の裏に富士山と刻んだ大きな石碑が建っているが、いつ頃のものか年代も不詳で知るすべはないが、恐らく富士山講があり、その講中により建立されたものと思われる。近隣にも富士講の名称で存続しているところもあるので、霊峰富士信仰は古くから各地にあったものと推測される。



江戸講

この講については既に知る人もなく、推測にすぎないが昨年、取り壊した昔の鳥居は今から二百三十年前の明和五年七月江戸講中、三十七人によって奉納されたものである。柱をとりまくように氏名が刻まれているが現在の家との繋がりは不明である。その中には中富に存在しない苗字があるのでそのような人達によって構成されていたのであろうか

狛犬、手洗い、灯

籠、鳥居が約二十年のうちに設置されていることから、果して同じ講中なのか、また手洗いには卍が正面に大きく浮き彫りになっていることから神佛混淆こんぶうの時代、お寺に関係のあった講なのか謎である。今後の調査を待ちたい。



石上神社境内にある手洗い

えびす講

えびす講は、昔から福の神を祭る行事として、今現在なお年二回行われている。えびす大黒を祭ることで、大黒様は、おおくにみしのみこと 大国主命、えびす様はその子供でこと台主命のしろぬしのみことこと。

一月十日にこれから稼いで来て下さいと頼み、十月二十日に、たいへん稼いで来てくれて有難うとお礼を言いお金をあげる。一月と十月の御馳走は、二つの御膳に大盛の御飯、お頭付の魚、野菜の煮付け（ゴボウ・人参・大根・里芋・油揚・等その他季節の野菜）ナマス、香物等である。

お燈明をあげ、しばらくして一つの膳を、その家の主が、もう一つの膳は、相続人が食したとのこと。今の時代では誰が食べるか決めずに、その膳を皆でいただく。

飽食の時代、この様な事はないと思うが、その当時には色とりどりの膳は、たいそう御馳走に見えたのを記憶している。



秋のえびす講

第四節 講と女の人達のかかわりあい

講という字を広辞苑で引くと、仏、菩薩、祖師などの徳を賛嘆する法会とか、神仏を祭り、または参詣するために組織する団体とある。

子育てと家事及び、農作業に明け暮れていた女の人達は、一仕事終えた後、当番の家に集い、念仏を習い、軽い食事とお茶を飲むという講の集まりで信仰を深めていったようである。

観音講………月一回、年代別に気のあつたおばさん達が、観音様の掛軸の前で念仏を唱え、食事をし、お茶をのみ、世間話に花を咲かせたという。今では、だんだん受け継がれることもなく自然消滅してしまつた所もあるが、まだ三、四人で細々と観音講を受け継いでいる町内もある。

七夜様………年四回、正月、五月、九月、十一月の十七日から二十三日の七日間、七夜観音の掛軸を祭り、次のように念仏を唱えた。

十七日 せんじ観世音

雨風の 災難すくう 観世音

祈る我身は すぐしかるらん

十八日 しょう観世音

なにごとも 寄せたまへ 観世音

願う心は、しそん繁栄

十九日 馬頭観世音

くわんおんの 七夜をまぢる そのひとは

悪じ悪病、災難もなし

二十一日 しよみ観世音

巡礼の、やまじにまよう、ともがらは

えいがのりやく、道はひとすじ

二十日 めん観世音

あらたかに 見上げて拜む 観世音

縁を結ぶや、りしょうあるべし

二十二日 によいん観世音

一心に願いをたてし、によいんをば

なんざんすくう こやす観世音

二十三日 ぜいし尊

つきまでも、きよめてまぢる その人は

いかなるつみも、きえうせにけり

子安講……石上神社の銘のある掛軸と子安様の掛軸を祭り各町内毎に、毎月一回、子供のいる若いお母さん達が、当番の家に集まり、子供の無事と成長を願った。現在では年一回から二回程度の集まりで続けられている。

どの講も時代の流れの中で、村人との結び付き、信仰とのかかわりあいを講に求めなくなってきた事も事実である。

百万

毎月一回、満月の夕方、各家の門で、一つの大きな数珠を繰りまわしつつ、皆で念仏（南無阿弥陀佛）を唱えた。

神社から鐘をならしながらはじめ、各戸をまわり、最後に次の当番の家におさめて終わりとなる町内や、家の門に線香をともし、最後に神社で終わりとする町内もある。昔は、鐘が聞こえてくると、各家から子供が出てきて、大きな数珠を持ちまわったが、現在では子供の姿を見ることは珍しくなった。

神社での唱えごとは「懺悔文」と言い

我昔所造緒悪業

皆由無始貧瞋痴

従身口意之所生

と唱えた。神仏混淆のなごりを残している習わしである。

一切我今皆懺悔



百万講

第五節 大乘妙典書寫塔

平内廟に接し丸型の大きな石塔がある。中心に大乘妙典書寫塔とあり、一字一石一禮と記されている。建立の由来については次のように伝えられている。

昔、中富村に悪疫の発生相つき、患者、その家族は村人から交わりを絶たれ、はては家族離散の憂き目をみる。

為に村人病魔を怖れ、民生の不安難澁じじすること甚しかった。たまたま當山九世中興了宗禪達大和尚これを痛み、佛の大慈悲をもつて民生を安んぜんと一大心願を起こし給い、如来の金口こんくなる法華經八卷二十八品を一石に一字を書写し、一礼し重ねつつ、ついに七萬一千八百余言の書写を完成し、加わうるに觀世音菩薩普門品を複書し大願を成就し給う。

時に文政九年（一八二六）二月大安日、和尚七十一歳、以來法華經書写の功德により、病魔は封じられ民生の安きを得しという。村人挙りて大和尚に敬仰感謝限りなく。

ここに大乘妙典書寫塔を建て、了宗禪達大和尚の大偉業を讃え、以つてその聖徳を後生に傳うものなりと。



第六節 大草平内廟（日の宮様）

境内の左側に位置する小祠が『日の宮様』である。この由来については中富の行事「お日待ち」と重複するので、地頭大草平内について記述することとした。

大草平内は宝徳三年（一四五二）頃小笠原持長の子、長宗が大草七郎を号したことに始まり、長宗から数えて十代目が大草平内義徳（則）である。大草甚右衛門吉次を父とし、母は多田宗右衛門の娘であり、寛永十七年（一六四〇）九月二日、上総国周准郡に生まれた。幼名を孫助、天乃助とも呼ばれた。

君津市人見（神門）の大草家の墓所に大草平内の供養塔があり、同家に代々伝わる系譜がある。漆塗りの筒に収納され大切に受け継がれて来たと思われるが、一見して格式の俣ばれるものである。そのコピーを編集委員で拝見したことがあるが、巻紙で長さ八米位、達筆で揮毫されている。

泣く子と地頭には勝てないノという昔の諺があるが、小笠原家の家臣として中富の地頭となり、洪水により難儀している状況を見かね、小糸川を直線にする河川改修に盡力したのである。然しながら、元禄四年、小笠原家の転封により、地



頭職を辞することになるが、その後も改修について上司に働きかけ続けたのである。元禄十二年、完成を見ることなくこの世を去った。享年六十歳であった。その徳を慕い「お日待ち」という行事が現在も続いているのである。

第七節 大般若波羅蜜多經六百卷

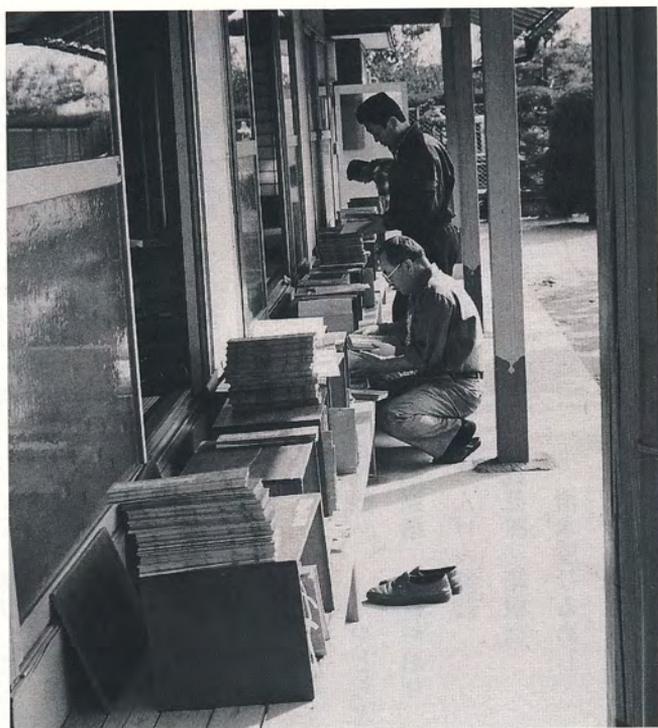
この經典六百卷は十二箱に収納され、富西寺本堂に安置されている。今からおよそ百五十年前の弘化元年（一八四四）檀家により寄進されたものである。全六百卷を所藏する寺は珍しく寺の宝として代々大切に保管されてきた。

經典の由来については、多くの文献に記されているが、中国は唐の時代、玄奘（六〇〇～六六四）は二十九歳の時に長安を発つて約十七年間、インドで佛教を学び多くの經典を携えて帰国した。その後十九年間、翻訳に専念し「大般若經」六百卷を訳し「一切皆空」の悟りを説いたのである。

正しい智慧を明らかにし、万物には固定した実体がないから、執着すべきではない、一切がすべて空と説いている。

毎年二月十一日、大般若と称して富西寺本堂に檀家の人々が集まり、經典六百卷が読経される。長時間かかるので二、三名の和尚により、転読と称して各巻の前後が読み上げられているようであるが、声も大きく經典を扱う動作は圧巻である。

約一時間半かけて供養を終るのである。



經典六百卷の虫干し作業

第八節 お参り

七天王まいり

毎年、初夏に行われる、婦人達の行事であった。

ふれ元よりの呼びかけで、石上神社に集合、村の天王さまに参拝し、出発。途中、五ヶ所ほどの天王さまにおまいりし三直の天王さま（八雲神社）までの、道のりであった。

水筒とてっぽう巻き（のり巻き）を各自持参。八雲神社の境内で昼食をとり、一休み。そして、天王様のお札を受けて、家路についたのである。

天王様は、悪厄よけの神であり、こどもの無事な成長と家族の健康を願って、母親達がおまいりしたのであろう。

遠くまで歩く、七天王まいりは、たいへんであったが、一日、家族から解放された、楽しいレクリエーションでもあった。

その後、村全体の行事から、婦人部の行事に移り、昭和五十年代まで、続けられた。

伊勢、金乃比羅、善光寺参り

中富にもかつては、たくさんの講があり、毎年代参を送っていたが、現在遠くへ出かける講は古峯講だけとなってしまった。自治会に残っているものは集金票ぐらいで参考になるものは現存しない。幸い六右工門に道中記があつたので掲載した。

明治十六年 旧曆二月三日

伊勢、金乃比羅 道中記

一、旧二月三日、出立大掘村市助の舟にのり午後四時横濱に

つく

一金拾五銭 舟ちん 一金廿三銭 やどちん

一金式銭 はしけ 小田原宿 片野や泊り

一金廿二銭 やどちん 箱根ごんげん参詣

横濱元町 泊り 一金五銭五厘 箱根宿

四日 天気 清水屋ひるめし

是よ里東海道戸塚宿へ出立 一金拾九銭 やどちん

一金四銭 藤澤かどや昼飯 三嶋宿箱根や泊り

一金廿一銭 やどちん 此宿ヨリ国元へ手紙出す

平塚古田や泊り 三嶋明神へ参詣

一金八厘 はしけ 一金三銭 原宿かどや昼飯

一金一錢 前河村ひる飯 一金五厘沼津舟ちん

元吉原より蒲原宿へ新道阿つておよそ壱里半の近道なり。

富士川越、川原廣し、 一金壹錢貳厘 ふじ川舟ちん

紙面の都合で残り省略

旅先の安全を願うことは今も昔も変りないが、大勢の人々に見送られて出発したことであろう。道中記は毎晩宿屋で記入したと思われるが、支出金については落ちなく記されているようである。貨幣価値の違いで見当がつかないが、昼飯が全国どこでも二錢ぐらい、宿ちんが貳拾錢前後である。

初めて見る他国の情景を物珍しく眺めながら、途中では名所や旧跡に立寄って、見物しながら歩いたようである。大阪から蒸気船に乗り、四時に出帆、明朝四時にあわの国多度津駅に着船、船賃一円、同日金乃比羅へ参詣、みやげは御守り、その他いろいろで五拾五錢五厘を支払っている。午後四時の船に乗り、明朝六時に大阪に帰帆、京都の寺院を回り、その後善光寺にも立寄っている。記帳が終わっているが結構楽しく旅をしたようである。伊勢講の集金票が自治会に残っているのが代参であったのか、仲間は誰で、何人で行ったのか、残念ながら記述がない。天保十五年には貞元の百姓貳拾貳人が団円で伊勢参りをしていることから、恐らく近隣の各村で

は同様のことをやっていたものと思われる。

第九節 不動堂

昔の凶面から境内に入るとすぐ左手に不動堂が建っていたようである。昔の神輿堂の場所らしいが、或いは神輿堂が不動堂であったかも知れないが記録には残されていない。

本堂に大型の台座やばらばらになった佛像があるが、不動明王かも知れないが今後の調査を待ちたい。

商売繁盛や、もろもろの煩惱ぼんのうを焼きつくしてくれる不動様は一般庶民の信仰を集めていたことと思われる。



第十節 中富共同墓地とお盆

上総国周准郡中富村

本寺上総国西川村正珊寺末寺

富西寺

一、本尊 観世音菩薩

一、由緒 創立、寛文六丙午年二月來中盛從を開祖し本寺を開創す。

中富の共同墓地は昔から富西寺の裏と、石上神社の北側の二ヶ所となっている。現在公会堂の建っている場所は明治の初めまで十王堂があり、周辺に墓石があつても不思議ではない。しかしこの場所への埋葬は大正十五年を最後に新しい墓石はない。古いものでは寛文二年（一六六二）延宝（一六七三）の時代のものがあり、昔から富西寺と両方を使つていたことになる。

士族階級は別として、農民が墓石を建てることのできる様になつたのは、元禄時代（一六八八）からという説もあるが中富には古い時代のもが多いようである。平成七年に古文書を解読するため、各家の古い墓石に刻まれた屋号を調査してもらつたところ、寛永十五年戊寅年（一六三八）が一番古

く同時代のものが、数軒あり、正保、承應、万治、寛文と元禄以前のものが全戸数の半分近くあつた。石を産出しない千葉県にどのようなにして墓石を運んだのか。高価であつたのを知りたいところである。また享保十九年（一七三四）の墓石がたくさんあり、はやり病か、それとも災害か、残念ながら記録も言い伝えもない。

富西寺の創立が寛文六年となつているが、墓石はそれ以前から共同墓地に立っていることから、この土地に人が住みついた時から、村人の埋葬場所になつていたものと推測される。天正十九年（一五九一）の畠野帳に宝蔵寺の除地（免税地）が六反四畝、十王堂が一反四畝と記されている。真言宗であつたという説もあるが、七〇年後、何故に富西寺に変わり、禪宗になつたのか、全く不明である。

この共同墓地に一年に一度だけ村中の人々が集まつて賑わう日がある。八月十三日のお盆である。盆棚に先祖の霊を祭り、迎え火を焚き、夕方には盆提燈を持つて家族そろつて墓地へお参りに行く。一時お寺は大混雑である。色とりどりの浴衣を着た子供達、親に手を引かれ、淡い光の提燈を片手に本堂前で線香に火をつけ墓地に向かう。墓石の上に提燈を吊り下げ線香を手向ける、明かりに写し出されて煙の中を行き

来する浴衣姿は正に夏の終りを告げる風物詩である。しばし時をおいて提燈を集め、帰りは六地藏にお参りして家路へつくことになる。

この様な墓参りがいつ頃から始まったのか、知る人はいない。九〇才を越えた人も子供の時から同じであるという。違うのは手作りの提燈が見当たらないこと。お寺の前や、神社の通りに夜店が出てアメやかき氷を売っていたことである。珍しい行事であるので最近では遠くへ嫁いだ人達が子供や孫をつれて墓参りに来るようになったので年々人が多くなっているようである。

明朝十四日は夜明け前に墓参りである。ヤカンに水を入れ茄子を采の目に切り、重箱一杯に詰め、線香をもって裸足で家を出る。昭和三〇年頃からサンダル履きで行くようになった。

十六日午後、送り火を焚き、盆棚をとりはずして、佛壇に移して終りである。昔は真菰まこもに供物を包み、ゴザにくるんで小糸川へ流しに行った。

昭和十年八月十六日、母親と一緒に行った女の子がゴザから落ちた。『ほおずき』に手を伸ばし、滑って川に落ち流されるところという悲しい事故が起こったのである。村中大騒ぎとなり、

消防団員が中心になり川に入って懸命に探したが見つからず三日後、四百米位下流の大和田揚水の杭のしがらみに沈んでいるのを団員が見つけたのである。近くで探していた父親が駆け付け、震えながらわが子の亡骸を抱いている姿に、大勢の村人は涙したと

いう。小学校三年生、名前を『すえ』といった。あどけないおてんば盛りの子供が四日目に佛となつて家に帰つたのである。

六十年を過ぎた今も盆棚の赤いほおずきに、あの時親達が真剣に話し合っていた姿が重なつて見えるのも不思議である。



中富共同墓地

第十一節 小糸の作 薬師尊札所とお開帳

るりの匂ひも 高き山かな

四拾九ヶ所

安政二乙卯年

薬師尊札所

第一番

釜神 神将寺

小糸川 下る薬師の 湊にて

世に釜神と 名をぞふれける

第二番

中野 長安寺

のりの道ひろき 中野に入し身を

すくわせ給へ るりの浄土へ

第三番

中富 富西寺

善悪の その中ずみにめぐりきて

心もすぐに 拝む御仏

第四十九番

鹿野山 神野寺

よろずよの 願いもここに 鹿野山

薬師尊のお開帳がいつ頃から始まったのか、さだかではないが、明治初年（一八七〇）生まれの年寄りが、先代の人達の言い伝えを話題にしていたことから、庶民信仰として江戸時代から定着していたことと思われる。寅薬師という言葉もあるように、十二年目に巡ってくるお開帳は、楽しみの少なかった女の人達にとっては待ち遠しかったに違いない。お客の接待はどうするのか、巡礼先でのおどりの披露や、地方（唄う人）は誰にするか、着て行く物は、等々話題の中心になつていたようである。

期間については田植えの終わった頃ときまっていたようであるが、いよいよ当日がせまってくると各札所で準備が進められた。札所の場所が遠くから見えるように、五色の吹き流し（マネキ）が長竿の先につけられ境内に立てられた。また村の入り口から札所まで道端に数多くの案内旗を立てた。

本堂の奥に安置された薬師尊の厨子が開扉され、御手から五色の糸で向拝に結び更に縁の綱（さらし）が境内の角塔婆にしつかりと結ばれた。

巡礼者が見えると札所の当番役は梵鐘を打って村人に知ら

せたのである。踊りを見るため大勢の人が田圃から駆けつけたという。緋の着物、裾には赤い腰巻きが見え、白の脚半に白の手甲、笠をかぶり、白いタスキをかけて大勢で野道を歩いてくる姿に見惚れたことであろう。

縁の網を握り礼拝が終わると、網に吊り下げられた各袋に賽銭を入れ、札所のご詠歌を全員で唱え、終わるとお茶の接待を受ける。どこから、どんな人達が、親戚の人が居るのか、情報交換の場となるのである。ひと時の談話が終わると、お茶を戴いたお札に踊りの披露である。このため練習してあるので皆さんが大変上手であったと伝えられている。村人の拍手に送られ次の札所へ向う後ろ姿に、十二年後を思いうかべたという。

戦中、戦後、着物から洋服に代わり、自動車を使って遊山的なところもあるが、伝統と信仰の心はいつまでも残したいものである。今年も寅年である。すでに準備が進められている。



第十二節 馬頭観音様

小糸川が昔のままの自然をのこしていた戦前、(一九四五
年頃)、金堀は一部に雑木林があり、川岸まで広々とした畑
が続いていた。その畑へ行く道路の西側に位置する馬頭観音
様は、子供心にちよつと淋しい場所にあった。犬や猫、家畜
が倒れたとき、この場所に埋葬するからである。

現状は女竹に覆われた中に石碑が二基建立されており、春
の彼岸と十月の祭礼の翌日、年二回中富の行事として、村人
が集まり和尚の読経により供養がなされている。村中で供養
するようになった経緯については後述するが北側にある『良
馬塚』の三文字の記された石碑の裏面には次のように記され
ている。

良馬塚

良馬阿利羽州最上の産 文政六未年八月

大守藤君これを得て駕し給うに強駢駿発して馳驟意能

如く二勇ミ進て鞭影を待古登なし大守京都在勤五年日光山

出役兩度此馬常に志た可へ利凡役使春苗こ登二十餘年

古鉢によ利て深くいた八利お保領所に於みて養う遍具旨

称むころに命せられて是をおくり玉う然に丙午冬十月たを
る領主の慈愛し玉う毛能なれば村民厚くこれ越葬里塔於た
て々冥福をいとなむ古登志可利

文面からおわかりのように、この名馬は文政六年(一八二
三)の未年八月に山形県の最上で生まれた。大守藤君(この
地を治めていた殿様)はこの馬を使役していたのであるが、
荒々しいところもあり、強靱でしかも駿足で思うように走り、
鞭を使うような事はなかった。京都で勤務していた五年の間
日光(栃木県)に出役の際、二回ほどこの馬に乗っていた。
日頃、役目で出かける際にはいつもこの馬を使ってきたが
すでに二十年をすぎ、年老いたのでいたわりながらこの領内
でめんどうを見られるようにお願いして贈られた。

しかしながら弘化三年(一八四六)丙午十月に倒れたので
ある。大守藤君が我が子の様に可愛いがり、大事にしてきた
馬である故、村中の人達が集まって手厚く葬り石碑を建て冥
福を祈ったのである。

この碑文の内容からなぜ殿様の慈愛した名馬が、この中富
で倒れたのか、疑問の残るところである。土地の言い伝えに

兵左衛門の馬を埋葬したという話があるので、当主の齊藤秀男氏を尋ねた。

年寄からこの事について聞いているが、間違いなく我が家で倒れた馬を村中で埋葬したという。この馬は農耕のために飼育していたものではなく、殿様から預かって面倒を見ていたという。姿の美しい白馬であったが、使役が無理になったのか年老いたので余命の面倒を任されたのである。何故に我が家で預かることになったのか、すべては不明である。

恐らく中富村の領主であった保科様の馬と思われるが、関係については謎である。

南側の石碑には「馬頭観世音菩薩」昭和十五年十月。

中富警防団之建。と記されている。今から五十数年前に建立されたもので、この時から年二回の供養が行われるようになったようである。その経緯について近所のお年寄は次のように話してくれた。

昭和十年代の初め、釜神へ続く道路は低く大雨が降れば小糸川が増水して水没するので、馬頭観音様の続きの畑から土を運搬して道路を高くしたのである。この作業は道普請と称して昔から部落行事として、各戸から必ず一名用具を持って

参加したのである。

道が高くなり一安心も束の間、この後に奇怪な事が起ったのである。小雨降る夜ともなれば、普請をした道路には青白く燐が道筋に光り、歩けば下駄や靴の底につき、自転車に乗ればタイヤが光の輪となつて回り、怖い体験談が次々と伝わってきた。この話を聞いた子供達は夜トイレに起きられずこの親達も困っていたようである。

しかし本当の危難はこの後に始まったのである。中富の区長（自治会長）が次々に三名の方が若くして急逝したのである。村中が大騒ぎになったことは言うまでもない。原因は馬頭観音様の土を道路に敷いた動物の怨念ではないか。噂が噂をよび不安におののく日々が続いたのである。

漠然とした不安の中で、部落役員で協議の末、とにかく占いで見てもらうことになった。その頃、よく当ると評判の易者、牛久（市原市）の寝釈迦の所へ出かけたのである。

見立ては噂の通りで先ず和尚により供養をすること。道路に敷いた土を所どころから集めて馬頭観音様に戻し、土盛りをしてその上に供養碑を建立すること。さっそく実行に移されたようであるが、年寄達も何とかこの災難から逃れることができるようにと、塚の前にムシロを敷き大勢で念佛を唱え

平穩になることを祈願したのである。

しかしこの状況では区長になる人がなく、どのように人選したらよいか、再度寝釈迦をたずねたのである。とりあえず組織の長になっている人に代行してもらうことが望ましいが、特に火消しの長なら大丈夫ということで、時の警防団長、齊藤六助氏（六治郎）に白羽の矢が立ったのである。ところが家庭内では大騒ぎとなり、家族反対の中、六助氏は区長を引き受けてくれたのである。

その後、信心が届いたのか、ようやく危難から脱し平和な暮らしに戻ったと伝えられている。

昭和十五年、戦中ながら巷には「誰か故郷を思わざる」の流行歌が流れていた。戦争は遠い他国の出来事として平和なひととき
の時代であつた。



10月10日、村人による馬頭観音供養

第十三節 石上神社

旧村社

鎮座地 君津市中富四一七番地

祭神 石凝止命
いしこりとめのみこと

例祭日 一〇月九日

主要建物 本殿・亜鉛板葺神明造一・五坪、幣殿・亜鉛板葺

四坪、拝殿・瓦葺神明造六坪

境内坪数 三五六坪

氏子 六〇戸 宮司 宮崎博之

由緒沿革 地勢平坦にして老松亭々として、天空を摩し雑樹

繁茂し社地を蔽う、社伝に天正一九年（一五九一年）本

殿を創建するとある。徳川時代には領主小笠原氏の、崇

敬厚く、祭祀料を献納し武運長久を祈願したという。安

政六年（一八五九年）火災にあい社殿、什宝などすべて

焼失。明治二四年九月現社殿再建。

安産の守護神ともいわれている。また、祭神に倉稲魅

命が祭られているといわれているが登記はされていない

末社に一座（天王社）が拝殿の南側にある。

（千葉県神社名鑑ほか）

◇石凝止命・石凝姥命（日本書記）・伊斬許理度売命（古事記）

イシコリは鑄重の義、度売は老女という。天抜戸鎮の御子。

天照大神を天の岩戸から出すために、高皇産巢日神の御命に

よりて、天津麻羅等の部人を督し、天香山の金を取りて鏡を

作った神。

また、天孫降臨の際につき従った五部神の一つ。一説に、

天香山命の異名であるとも伝える。（神道大辞典ほか）

◇倉稲鬼命（うかのみたまのみこと）

食物の霊。倉稲は食稻の誤りではないか。食物、殊に稻の神

女神なり。稻荷の神。転じて商売繁盛の神。（大言海）

◇天王社 主神は素盞鳴命（旧牛頭天王、単に天王様）疫

病除けの神、京都八坂神社系。疫病除けの願かけに七天王

（三直、久保、下湯江ほか）参りがある。八坂神社系の社紋

が□紋（キュウリの切り口をかたどったものだと言われる）

であり、三直ではキュウリを敬い、今でもキュウリは食べな

いといわれている。

◇境内地の概要 灯笼は宝暦年間に、鳥居は明和五年に江

戸講中の方々により建立され、拝殿右側に疱瘡除けの神、本

殿裏側に御嶽三極犬神富士講等がある。

◇中富と人見神社（郷社） 中富は人見神社（俗称人見の

妙見様)の氏子であり、二月二十二日春祈禱・七月二十二日大祭・十一月二十二日献穀祭・通称二のつく日の祭事等に参席している。

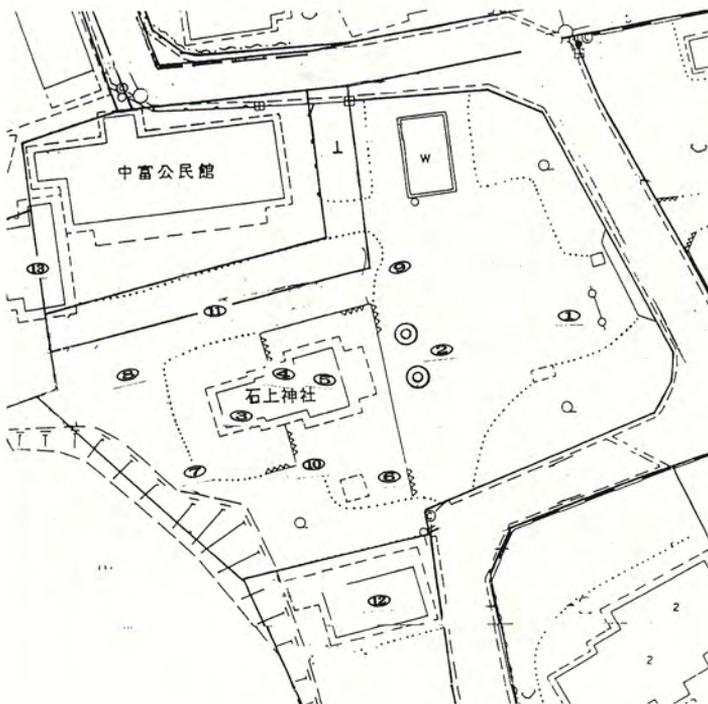
なお人見神社は旧君津、富津、大佐和三町(旧十七ヶ村)に五千戸の氏子がいる。

山から見渡すと十七ヶ村見える。また、飯野方面からは人見山が獅子の形に見えることから獅子山とも言われており山を介して、生活ならびに信仰協同体が形成されてきた。

◇鳥居の建設 約二五〇年もの間、風雪や地震に耐えてきた鳥居も笠木の部分にひび割れが発生し、そのひびが年々大きくなり、崩落の危険が予測されてきたので、平成七年七月神社総代と自治会役員により「鳥居建設委員会」が組織された。建設にあたっては、村内の氏子六十六戸は一律一万五千元とし、村外一戸を加えた寄付金により、木更津の石材店に八十万円で発注した。

竣工式は、平成七年七月二十六日に建設委員により、竣工式は同年十月九日石上神社大祭の折、多くの氏子が参列して執り行われた。

取り壊した鳥居の内、柱二本は建立された往時を末永く偲ぶことができるように、と保存することにした。



◇境内図

- ① 鳥居
- ② 灯笼
- ③ 本殿
- ④ 幣殿
- ⑤ 拝殿
- ⑥ 天王社
- ⑦ 御嶽三極犬神
- ⑧ 富士請
- ⑨ 疱瘡除けの神
- ⑩、⑪ 由緒不明
- ⑫ 老松のあった所
- ⑬ 参考 行屋

第十四節 富西寺

中富の中央に位置し、東方には農地が広がり、境内の西側には樹木がうっ蒼と繁り土地は平坦で閑静である。曹洞宗に属し富津市西川の正珊寺、末寺である。境内は三百八十二坪本尊は阿弥陀如来である。伝えによれば寛文六丙午歳の開創といわれているが、共同墓地にそれ以前の墓石が見受けられるので事実はまだかではない。

昭和六十三年、第十五世悌忍大和尚の御逝去により、平成六年より上湯江徳常寺住職の新野利行和尚の兼務となっている。

富西寺は中富一箇寺であり、檀家は六十戸、他地域檀家三十戸である。総代三名が管理運営の世話係を勤めている。

本堂は間口七間五分、奥行五間五分と記録されているが極めて質素な建物である。昔から建物は檀家の財力にかかわるところが大きいとされているところから、中富は耕地面積も少なく、その上水害があり、副業でやっと生活してきた状況から、今まで立派な本堂が建立されたとは考えにくい。幸い火災による消失はなかったようであるが、安政の大地震でも潰れたと思われるし、大正の震災でも潰れ、現在の本堂はその後に建立されたものである。



